

【追悼】

米沢治文先生を偲ぶ

三瀨信邦*

経済統計学会（旧経済統計研究会）東北支部の米沢治文先生が去る2004年1月16日に93才の高齢で逝去された。

先生は1911年（明治44年）1月17日に東京市新宿区本塩町20-3に誕生、旧東京高等師範学校附属中学を経て、1928年（昭和3年）年に旧制第一高等学校の文科甲類（英語が主専攻）に進まれたが、『資本論』などの読書サークルに属していたため、当時のことだから論旨退学ということになった。そこで、東北帝国大学法文学部の聴講生となり、やがて本科生となって林鶴一先生（数学）の講義を受講された。勿論、「数理統計」であった。やがて、副手、助手、講師、助教授、教授と昇進され、1956（昭和31）年8月に経済学博士の称号を授与された。この間、和田佐一郎先生に「原論」（シュンペーター）を、堀経夫先生に「経済史」を学ばれた。その当時の教授陣には長谷田泰三教授（財政学）、宇野弘藏教授、服部英太郎教授（社会政策）、中村吉治教授（日本経済史）などもおられた。なお、米沢先生は東北大停年后は東北学院大に奉職された。

1937年（昭和12年）の米沢先生の副手時代に東大経済学部から有沢広巳先生が非常勤講師として東北大に来学されたが、『統計学講義案』（明善社、昭和9年4月）を使用しておられた。これが米沢先生の統計学に大きな影響を与えたと思う。

私は1943年（昭和18）に東北大に入学、ゼミは実は財政学（長谷田泰三教授）であった。したがって米沢先生のご指導を受けるように

なったのは、在学中の講義（統計学）は受講していたが、むしろ私が東京教育大学に職を得てからではないかと思う。その後のご指導は今日まで長い年月であった。

当時の経済統計研究会は「関東・東北支部」であったが、やがて米沢先生を中核として「東北支部」が独立した。支部としては小規模であったが会員は多くの労作を発表している。

先生の著書・論文はまことに多いが、著書としては、

『工業経済統計』（1945年3月、第一出版株式会社）

『統計の諸問題』（1947年4月、有恆社）

『統計学』（1948年7月、河出書房）

『工業経済の基本問題』（1950年6月、実業之日本社）

『経済統計学の展開』（1955年9月、頸草書房）

『講要統計学』（一條勝夫・鈴木光男と共著、日本評論社）

『経済統計計量分析』（1972年、日本評論社）

論文はその数がきわめて多くとてもここにその全部を記すことは出来ないが、特徴的なことは「標準化計算」（地域別人口構成、賃金の年齢別構成など）と「学説史」に主力が注がれているように思える。また、1944年（昭和19）からは「工業統計学」の講義とゼミも始められた。

余談であるが先生はきわめて物静かな方でヴァイオリン奏者として東北大オーケストラのメンバーであったと記憶する。講義ではいろいろ御教授いただいたが、あまり饒舌ではない先生の講義中に「ジュースミルクは甘い牛乳ですね」といわれたことを思い出す。その頃、1941～43年といえは授業の中間に大学

* 筑波大学名誉教授

生も軍用飛行場（苦竹・にがたけ）の造成に動員され、青い服の囚人たちと一緒に働かされたことを思い出す。米沢助教授もゲートルと戦闘帽で参加しておられた。

先生は1911年1月17日に誕生、2004年1月16日に逝去、というまさに満93年を生き抜かれた。まことに先生らしいキチョウメンさである。国内の学会出席は勿論であるが、ISIにもワルシャワ大会をはじめ数回参加しておられる。

先生の御冥福を心から祈念する。

追記：本稿の執筆にあたっては、1974年（昭和49）3月に「東北大学記念資料室」で作製された『米沢治文教授著作目録』を参照したが、ここに特記したいのは、1980年度、1981年度、1982年度に実施された文部省の科学研究費総合研究による「日本における統計学研究の発展」と題する諸先輩に対する聴き取り調査のことである。この調査は、文部省統計数理研究所の西平重喜氏を中心に行われたが、聞き手は2～3人の統計研究者で、速記者も同席した。結果は個人別

に出版された。今後の参考にもなると思うので、聴き取り対象者の氏名を下記する。佐藤良一郎、寺尾琢磨、宗藤圭三、美濃部亮吉、米田桂三、河田龍夫、小川潤次郎、島津一夫、柴田武、牧田稔、青盛和雄、浅野忠允、医学グループ、兼子宙、北原一身、河合三良、杠文吉、山中誠之、高橋正雄、近藤康男、中川友長、林知己夫、H. パッシン、高木秀玄、正木千冬、鈴木清、黒田俊夫、小田原正巳、丸山博、曾田長宗、瀬木三雄、安藤次郎、伏見康治、田島一郎、鈴木諒一、伊大知良太郎、上杉正一郎、米沢治文、森田優三、柴田銀次郎、郡菊之助、山田勇、鮫島龍行、小田原登志郎、後藤正夫、小山栄三、北川敏男、坂元平八、松下嘉米男、水野担、大橋隆憲、久我通武、木村太郎、内海庫一郎、奥野定通、前田正久の諸先輩である。

著作からだけでは余り知ることのできないいろいろな情報が直接聴き得たという点ではこの出版物は今日でもきわめて貴重な内容を含んでいると思われる。私も本稿をかくにあたって「米沢治文」の分冊を参照したことは勿論である。

なお、原本は法政大学日本統計研究所に保管されている。